

グリム童話の世界

—現代に生きる子供たちにとってメルヒェンとは何か—

高野 享子

子供の情景

子供とファンタジー

メルヒェンと子供

メルヒェン体験

「語り」の効用

人生の教科書としてのメルヒェン

メルヒェンの残酷性と扱い方

子供の情景

ローベルト・シューマンは、子供たちのために作曲した数少ない音楽家の一人ですが、彼のピアノ曲「子供の情景」の中には、子供への無限の愛が静かに息づいております。多くの子供に恵まれたシューマンは、夜には子供たちのベットの横に坐り、愛児たちの眠りの前の、すばらしい時間を共に体験した幸せな父親の一人でございました。笑ったり声をあげたりする幼い子供たちの表情が、やがて疲れてゆるやかになり、眠りにおち入ってゆくまでやさしく見守り、子供たちと共に過ごした数時間の幸せな体験が、あの素晴らしいピアノ曲となったのでした。

子供たちは、昼間目で見、耳で聞いたものを全身で喜んだり悲しんだりして体得し、日一日と成長してゆく。この体験がやがては、子供たちの内面の世界を造り上げてゆく基となるのです。

昔の子供たちは、現代のように過度に発達した文明文化を持っていませんでした。その代り、広い原っぱがあり、いろいろな雑草が生い茂り、蝶や毛虫や蝸牛や、かたつむり何やらわけの分らない虫などが飛び交い、ひばりは空高く舞い上っている。面白い形の雲を何かに見立てたり、あるいは小川の中で、着物をびしょびしょにしながら暗くなるまで遊び惚ける、正に子供と自然とは、切っても切れない関係にありました。

それに加えて、夜には——これは私の場合ですが——何よりも「お話」が待っていてくれました。私たちが子供であった頃の目覚めはいつもすばらしかった。友だちの中にも、神経質そうな、寝不足な子供といったものはいなかったと記憶しております。

さて文明文化というものが、隅々にまでゆき渡った——特に都会に住む子供たちが、これに相当するのですが——現代に住む子供たちは私たちの子供の頃とは、全く異った条件の中にあるということができません。交通機関の発達と騒音、賑にぎしく飾られたショーウィンドーや広告の群。それと平行して家庭の中も大分変って参りました。昔、私が子供時代に見慣れていた「かまど」は消えて電気釜になり、箒の代りに電気掃除機など、また農村にあっても、大型の耕作機械類、数えあげたらきりがありません。すなわち現代では、人間の労働というものが機械と結びつくようになったということになります。それにつれて本来眠るべき時間になっても、テレビやラジオの音、自動車の音などに妨げられ、子供たちは、精神の、心の安静を得ることが難しくなっています。このような日常の多すぎる情報や刺激は、弱い子供の心を狂わせ、生まれながらにして持っている筈の、子供の本能的な感覚は鈍くなり、ファンタジーのない、自発的で自然な好奇心のない子供が多くなって、学校に在っても、学ぶことの喜びを感じないような子供たちが増えていることは、よく耳にする事実でございます。

昔の自然な環境は、子供たちに平和な眠りを贈ってくれました。それは明日への健康な活力を約束してくれるものだからでございます。娘がまだ幼稚園に行っていた頃、先生がある日、夢についての質問をいたしました。

「夢の中にクレインが出て来て、それに挟まれて、上ったり下りたりして怖くて目が覚めた」と報告した男の子がありました。この子は母親に「あぶないから行ってはいけませんよ」と、いつも注意を受けていた工事現場にクレインを見に行き、昼間ひどく叱られました。

幼い子供にあって昼の体験は、このように夢となって現われるのでございます。

子供とファンタジー

これはほんの一例ですが、では一体こういう現実私たち大人は、どのように対処したらよいのでしょうか。有難いことに神様は、人間というものを大変上手にお作り下さいました。そのお陰で私たちは、もっと別の方法で、自然から受けるのと同じ恵みを、受けとる能力を備えております。人間の「創り出す」という能力がそれです。子供にあっては、ファンタジーの力となって現われて参ります。ドイツ・古典主義時代の詩人、フリードリッヒ・シラー(Friedrich Schiller, 1759

—1806)は、「ファンタジーに満ちみちた子供たちの遊びは、人間にとって最高の幸福である」と言いました。ロマン派のジャン・パウロ

(Jean Paul, 1763—1825)という詩人は、彼の教育についての書の中で、

「小さな子供たちに、ちっぽけな枝を一本与えなさい。彼らはその枝にファンタジーの力で、薔薇の花を咲かせるでしょう」

と書いています。子供たちは枯れ木に薔薇の花を咲かせる能力を持っている。それは子供の自発的な意志に他なりません。子供の内的な成長は、常に自然の中の遊びを通して展開されてゆくものなのですが、この間の事情をグリム兄弟も「グリム・メルヒェン」(正確には、「Kinder- und Hausmärchen」子供と家庭の童話)第二版の中で、「子供とメルヒェンの類似性」について次のように書いています。子供というものは自然に一番近いところに息づいているものであり、聖なる存在である。従って民族の持つ純粹な精神の象徴であるところの、民族に古くから伝わってきたメルヒェン(昔話)は、子供のファンタジーの世界と簡単に一体となることができるといい、そしてさらに、

「だれの手もくわえられないメルヒェンこそ、民衆の本来の詩的な考え方や信念を象徴するものである」

「……だから私に言わせれば、メルヒェンは決して子供たちのために作られたものではないけれども、それは子供たちの望みに適うものである……」(ヤークوپ・グリム)

すなわち、メルヒェンは、人間の本源的な内的なものと深く結びついているものであるから従って、

「これらのメルヒェンは、子供たちのところにも、老人たちのところにも宿っている」

ことになるのである。

メルヒェンと子供

或る年令まで子供たちは——四、五才まででしようか——同じ話をくり返しくり返しせがみます。メルヒェンに内在している形象と感覚の世界が、まさに子供たちの欲している内的世界にぴったりと当てはまるからです。ドイツの、最年長の語り手の一人であるシャルロッテ・ルジュモン夫人は次のように言っています。

「メルヒェンは語られるべきである。聞くことの中でのみ魂は自由であり、⁽¹⁾独自の想像力の翼を羽ばたかすことができる」

「語り手」が、「狼と七匹の子やぎ」を話します。期待に満ちみちた子供たちはじっと耳を傾けています。

「むかしむかし森のそばに、小さなお家がありました。……」

目をいっばいに見開いて、語り手の、またお母さまの口で語られる一言一言を全身で受けとめます。狼が一体何を仕出かすのかと、小さな

拳を握りしめ、ちょっと不安げに。小さな子やぎが時計の中に入り込んだ時、子供たちの心は、不安ではありながらも、語り手(お母さま)が絶対に助け出してくれるという信頼感と、そうでなければならぬという希望の気持ちで一杯になります。子やぎのお母さんが帰って来て、小さい子やぎを抱きしめて、大きい兄弟が次々に助け出された時、この時こそ、悪い狼は重い罰を受けなければなりません。こうすることによって、はじめて子供の心の世界には調和と満足が取り戻されるのです。このような心の活発な肯定への意志が、彼らの将来の運命を決定する大前提となるのではないかと思います。現在、高度に発展したメカニズムの中にあつて、鉄と石とでかためられた世界で過ごしてゆかなければならない子供たちにとって、幼い頃の、特に就学前のこの種の「メルヒェン体験」が、どんなに大切であるか、いくら強調しても言いすぎではないと思います。

メルヒェン体験

「メルヒェン体験」と私はここで申しましたが、メルヒェンのレコードやテレビのことを言っているではありません。レコードやテレビはお母さまの代りをしてはくれません。当座しのぎの代用品でしかないのです。無器用なお母さまの語りの方が、技巧的に凝った語りのレ

コードよりも、百倍も千倍もの価値があるからです。お母さまがそこに坐っているだけで、子供の心は満たされてしまい、そこには機械などの入り込む余地などありません。それは丁度、シューマンが子供たちのベットのそばに坐り、安らぎと愛を与え、自らもそこに新しい力を見出したと同じように、お母さまの語りは、現代の運命を担ってゆかなければならない子供たちの精神の世界を強化させる唯一の源泉であるからです。

さてお話を現実に移しましょう。ドイツの教育学者、メルヒェン研究家、語り手たちが口を揃えて言っていることがあります。それは特に今日の商業主義のおかげで、世界中に傾向として広まってしまっている、メルヒェンの低級化の問題です。ドイツ人は特に「グリム・メルヒェン」のアメリカ化、すなわちW・ディズニー化やマンガ化に対して大変敏感な態度をとります。単なる「物語り」として面白おかしく作られた、どぎつい挿絵入り絵本や映画やテレビの類が、感受性の強い子供たちの心を毒してしまいかという危惧からの批判です。こうした傾向をもった映画や絵本類は、都会のまった中に住み、親から余り大切にされずに育ってしまった子供たち、豊富な健康な子供の感受性を失って鈍感に育ってしまった子供たちのためのものであると言っています。更に誇り高いドイツ人にとって、先祖により育まれ伝えられた昔話が、簡単にアメリカ化されてしまうことに一種の侮辱

を感じるのでしょうか。

ここで私の失敗の経験を一つお話ししなければなりません。私たちが一家が日本を後にいたしました時、娘たちは六才と三才でした。主人と私は子供たちのために出来るだけ沢山のお話レコードを買ひ込みました。ドイツで毎日聞かせてあげたかったです。しかし私たちの場合、少々別の目的がございました。日本人である娘たちは、たとえ異国で育つにしても正しい日本語を身につけなければいけないと考えたからです。これは実は、日本語の勉強ということでは役に立ったのですが、一方では失敗であったのです。二人の娘たちは日本のレコードが、一特にピノキオ―大嫌いになりました。成長し大学生になった長女から「ピノキオが、これまで大嫌いであった」と聞かされた時、こんなにも長い間、それを知らずに過ごしてしまっただけで、全く迂闊な母親であった自分に後悔いたしました。

しかしこのように申し上げますと、「ピノキオ」というお話が悪い童話であるという誤解を招く恐れがありますので、次のエピソードをお話しましょう。

かれこれ四、五年ほど前のことになりました。高橋健二教授がドイツに來られました折、グリム兄弟が幼少年時代を過したシュタイナウというところにお供いたしました。そこでマーガーズッペさんという「人形劇団」を主宰する大変すばらしいご一家と知遇を得ました。

シュタイナウは私たちが住んでいるゲッティンゲンから南へ約二百キロ位のところにございます。一七九一年、兄のヤーコプ・グリムが五才、弟のヴィルヘルム・グリムが四才(2)の時に生誕地であるハーナウから引越して参りました。ここで二人の兄弟は、一七九八年、ヤーコプ十二才の秋、カッセルの古典語高等学校に入学するまで過した、二人にとってはすばらしい自然を持った、いわば故郷でございます。このようにグリム兄弟所縁の地でマーガーズッペ一家は、お人形も一つ一つ手づくりにして、主としてグリム・メルヒェンを上演しております。しかし高橋先生とご一緒したその日は、残念ながらグリムのものではなく「ピノキオ」の日でした。上演が終りこの時同席していた長女が突然、「私今日始めて、ピノキオが恐くなかった。このピノキオは好きだ」と言い出し、話が幼なかつた日のレコードと結びついたわけでございます。グリム・メルヒェンと子供たちに惚れ込んでしまったようなマーガーズッペ一家の演ずる人形劇は、子供の心を、成人した娘の心をいとも簡単に捉えてしまったのです。

こういった点について、ドイツのメルヒェン研究者たちは、子供の「精神の成長を攪拌し傷つけるレコード、テレビ、絵本類から子供を護ってやるのは親の責任である」と言っております。絵は柔かい線と芸術的に調和のとれたものを選ぶこと、子供の魂にやさしく近づき健康なファンタジーを引き出す助けをしてくれるものを選ぶべきである

と言います。

語りの効用

さてお話を「語り」にもどしましょう。グリム兄弟は、

「……メルヒェンは語られなければならない。語ってやると、その純粋なやさしい光の中で、子供の心の最初の思慮と活力が目覚めて成長する」と云って語りの重要性をくり返し述べています。メルヒェンは子供にとって単なる遊びや暇つぶしではなく、成長してゆく人間精神の土台となるものであるということが、その後の研究からも証明されるようになって来たのです。メルヒェンなどと軽視して育てられた子供は、はやい時期から、現実の大人の世界の中に投げ出され、もみやくちやにされてしまう。反対にメルヒェンの心を持って育てられた子供は、豊富な感情生活、調和のとれた明るい存在として育てゆく。それだけではなく彼らのはてしなく広がってゆくファンタジーの世界は心の財産となってゆきます。メルヒェンを語る母の、語り手の目や口の動き、顔の表情、それを通して形造られてゆくメルヒェンの世界の形象は、子供たちへの時間を超越した永遠の贈りものとなるでしょう。ヴィルヘルム・グリムの長男ヘルマン・グリム（一八二八—一九〇一）は、語り手である母親ドロテア（一七九五—一八六七）

と学者であり語り手という役目をもはたしていた父親に育てられ、自分の幸せであった子供時代のことを、グリム兄弟「回想録」の中で次のように書いています。

「かやうにして私達の兄弟は生まれた時からメルヒェンの世界に育てられ、この物語をそのまま古い古い歴史の事件のように思っていた。ほんとうにメルヒェンの中の不思議は、いつの世の子供にとっても新しい不思議である。……凡ての時代、どこの国の子供でも自然に対して或る共通した考えをもっている。即ち彼等は自然が、自分と同様に生きていて動いているものと考えている。森も丘も、火も星も、河も泉も、雨も風も人間のように物も言えば怒ったり喜んだりする。そして人間の運命の中に立ち交っているいろいろな所作をすると思っている」

このようにメルヒェンによって育てられたヘルマン・グリムは後に美術史家として知られるようになり、グリム兄弟の評伝などいくつかに世に出しました。

人生の教科書としてのメルヒェン

では次にドイツのメルヒェン学者を含め、彼らの言う「語り」の必然性は一体何に根ざしているのか、メルヒェンには一体どのような意

味がこめられているのかといったようなことについて、「ヘンゼルとグレーテル」を例にしてさっと触れて見ましよう。

貧しく食べるための一切のパンもない両親から子供たちが出て行かなければならないというモチーフは、メルヒェンの中でくり返されるテーマであります。

子供は生まれ落ちたその日から母親の腕の中でぐんぐん育てゆきます。七才の年令に達するまで親の腕を離れてはまた求め、慰められたり撫でられたり「両親の国」を行ったり来たりしながら、やがては独立して行きます。ヘンゼルとグレーテル兄妹の第一部が丁度この独立の時期に当ります。子供は一個の独立した「人格」であり大人の「小さくしたもの」でも模造品でもありません。二人の兄妹は最初家へ帰る道を探しますが、次第にそれが難しくなって、やがては家へ戻ることができなくなり、森の中で完全な孤独と飢餓に陥り危険に直面します。まず二人が見つけたものは「おいしそうなお菓子の家」でありました。当座の望みがかない食べたりかじったりしていると悪い魔女に捕えられてしまいます。ここから子供たちの受難がはじまるわけですが、一方、子供の身心の発育過程を考える時、これは是非とも通過しなければならぬ道であります。両親の国の明るい温室から脱け出て独立した人間になるための必要な法則であるわけです。子供が成長し一人で歩き出すためには人生の暗い面、地上の歪んだ面も知り学ばな

ければなりません。さてヘンゼルとグレーテルは魔女の命令に従わなければなりません。しかし同時に捕われのつらい日々の中から魔女を克服しなければならぬということを学びとります。知力と精神力の力がこれに加わります。これは与えられた運命を通してはじめて目覚め内面から湧き上って来た力です。第一、素直に魔女に食べられてしまふなんて愚かなことです。その後のストーリーは皆さま、すでにご存知の通りです。こうした物語を聞く子供たちの悪への反感、抵抗やその際に受ける不安からの解放感、聞き手である子供たちの琴線にふれ互いに喜び合い確かめ合う、これほど詩に満ちた社会的生活体験が他にあるでしょうか。子供たちはメルヒェンの世界から、勇氣と忍耐と誠実さや愛などと言ったものを体験し学ぶこととなります。メルヒェンとは、従って、子供の魂の成長への力であり、個性創りの前奏曲であると言えます。子供たちは幼稚園や小学校で体育や遊びを通して肉体の鍛練を行います、それと同じように精神力をダイナミックに操り育てゆくための内的力の鍛練をも怠ってはなりません。こうした要素がグリム・メルヒェンの世界の至るところに散らばっている。ここにもメルヒェンが何世紀にも渡って語りつがれて来た秘密があるのです。

さてメルヒェンの中の子供たちはひとたび家を出ますが必ず父母の故郷に帰って参ります。そして再び調和の世界が取りもとされること

になるのです。しかし幼い子供たちには「悪が負けて善が勝つ」という位のが理解されれば充分でしょう。

メルヒェンの残虐性と扱い方

「メルヒェンは語られるべきである」とグリムは言っていますが、残酷な場面を沢山含み持っているこのドイツの昔話、メルヒェンを、一体どのように取り扱ったらよいのでしょうか。多くのお母さまは、

「恐ろしい不安な場面の出てくる話を、はたして子供たちに語ってやってよいものなのだろうか」と心配なさいます。これは大変難しい問題で一言でお答えの出来ることではありません。しかし解決策の一つとして先ず「いかに」ということが問題となって参ります。シュタイナー幼稚園の先生の一報告ですが、確かにメルヒェンの中には恐ろしさを感ぜさせる箇所がありますが、語り手がわざと声をはり上げたり悲しそうな声を出したり不自然な身振りをすることの方がより問題であると言っています。そういう語り方はややもすると話の筋をばやけさせてしまうからです。或る小学校の先生は年令の低い子供たちに、たとえば「悪い狼」の語りの途中で「こんな悪い狼がみんなの前に出て来たら一体どうする?」といった調子で彼らの主体的な答えを求めたらよいのではないかと言っています。子供たちは歓声をあげながら

「逃げちゃったらいよいよ」とか「やっつけたらいよいよ」とか言いながら進んでそれに参加し、物語の中の悪者への刑罰に、自然的自発的な解決方法を探し出してくれるでしょう。「悪の没落」は聞き手である子供たちにあつては必然的な或る種の解放であり、従つて罰はできるだけ厳しいものでなければなりません。これはメルヒェンの一つの法則であり、現実の世界とは全く次元を異にした一つの別の世界なのです。

更に、子供たちの日常生活の中にさえ、メルヒェンの中でと同じような残酷な場面がいくらかでも転がっています。子供たちはその中で生き抜いて行かなければなりません。「お話」にかぎつて言えば、私たちの子供時代にも、例えば古いお宮の、黒い檜の木の下に集まつて或るむし暑い夏の薄暗がりの中で大きな人たちから聞かされた「山姥」の話や、日本の地方に伝わっている人喰いなどの恐ろしい話に悲鳴をあげて逃げたりした経験が沢山あると思います。こういう話を聞きながら成長した友人たちのみんなが、十五、六才頃になって異常ができたとか、どこかいぢけてしまったとか聞いたことがあります。

とは言うもののグリム・メルヒェンの中には三十話位の、語りに適しないものも勿論あります。これらの話は主として伝説などから派生して来たものなのですが、この種のもは、十一、二才位になった男の子とか、そろそろ何か秘密に満ちた冒険ものなどを好む年頃の、ユ

ーモアというものを理解出来るようになった子供たちに与えてあげるのがよいのではないかというのが、ドイツの語り手たち一般の結論であるようです。

とにかく語り手はその一言一言が子供の開かれた魂の奥深くに入り込んでゆくことを思わねばなりません。現代ではお母さまが安楽椅子に腰を下しその側で子供はメルヒェンのレコードを聞かされているという図が——ドイツで問題とされていることですが——よく見られます。ヨーロッパのどこかの国では電話でメルヒェンが聞けるという話です。これは子供に「パン」を与える代りに「石」を与えるようなものです。なぜならばそこには、語り手と子供たちとの血の通った関係、両者によって創り上げられた世界、心の通いが欠けているからなのです。ゲーテにシェークスピアやルソーを語り、ドイツ・ロマン派の人たちの師ともなったヨハン・ゴットフリート・ヘルダーは (Johann Gottfried Herder 1744-1803) 次のように言っています。

「メルヒェンを一度も語ってもらわなかった子供たちは、その情緒の領域に於て終生二度と耕されることのない情緒の荒地地を持ちつづけてゆくことになる」

グリム兄弟がくり返して言うように、簡潔な温い流れるようなことばで、歌うような調子の「語り」をいつも聞かされると、繊細な子供の精神はより強さを増し、反対に粗野で鈍感な子供は、その心に

やさしさと柔軟性を加えてくるでしょう。

同じメルヒェンでも、時として聞く子供の性格によって異った仕方でも語られてもよいでしょう。なぜならばやさしい女の子たちに語る場合と、あばれ坊主の男の子を前にした時とは、語り手自身の心の在り方が違ってくるのは当然だからです。幼い驚きと喜びに満ちてメルヒェンを聞くことのできる子供たちは、彼らが成長し大人になってからでも、柔軟な心をもって人生の現象を理解し乗り切ることが出来るようになるでしょう。

もとゲッティゲン大学教授、ヴァルター・キリー先生は (Prof. Dr. Walther Killy, 1917- 独文学者) 仰言いました。

「グリム・メルヒェンは……他のどんな文学でも成し得ないような形で、全人類に語りかけてくる。」

どうぞ美しい子供時代にメルヒェンを沢山語ってあげて下さい。「語り」のやさしい想い出はいつまでも子供たちの成人した生活の中心にまで鳴り響いてゆくことでしょう。

(1) 高野享子「ヨーロッパ童話会議に参加して」(「學證」第七十八卷 第十一号、昭和五十六年十一月、丸善書店 六頁)シャルロット・ルージュモン Charlotte Rougemont、一九〇一年生まれ。「話し手」。“...dann leben sie noch heute”¹⁾彼女の語り半生記を出版。目下日本語に翻訳中。

(2) グリム兄弟、兄ヤーコプ・グリム Jacob Grimm 1785-1863と弟ヴィルヘルム・グリム Wilhelm Grimm、1786-1859は、共に有名な言語学者。“Kinder- und Hausmärchen”は兄弟が協力して丹念に民衆の口から聞き集めたものである。兄弟はつづいて「ドイツ伝説集」(Deutsche Sagen, 1816-18)を出版し晩年には尨大な「ドイツ語辞典」(Deutsche Wörterbuch)の編纂に没頭した。その他、ヤーコプは「ドイツ文法」(1819-1837)「ドイツ古代法律」(1838)、「ドイツ語史」(1848)などを書き、弟ヴィルヘルムは「ドイツ英雄伝説」(1829)を書いた。

(3) 童話の産みの親として第一にあげられるのは、カッセル市でグリム兄弟の近所にあった「黄金の太陽軒」薬局の女性たちであった。このヴィルト家には六人の娘がいた。五番目の娘ドロテア(愛称ドルトヒェン)は、一八二五年ヴィルヘルムと結婚し、病弱であった夫を支え、独身で通した兄のヤーコプの世話をし、終生、夫のために童話収集に協力した。

「お膳よ、お仕度」(三六番)、「ホレおばさん」(二四番)、「ヘンゼルとグレーテル」(十五番)その他十数編を語っている。

「グリム兄弟」高橋健二、新潮選書による。九八頁。

「お膳よ、お仕度」(三六番)、「ホレおばさん」(二四番)、「ヘンゼルとグレーテル」(十五番)その他十数編を語っている。

「グリム兄弟」高橋健二、新潮選書による。九八頁。

高松短期大学研究紀要

第 15 号

昭和60年3月15日 印刷

昭和59年3月25日 発行

編集発行 高松短期大学

〒761-01 高松市春日町960
TEL (0878)41-3255

印刷 高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地